

# 革命的な女性についての三つの聖書物語<sup>1</sup>

ジョナサン・マゴネット

日原 広志 (訳)

物語を読むことは常に主観を駆使するものです。私たちは自らの背景、知識そして経験の長期的影響によって左右されますし、またもっと急激に起こる私たちの文化的環境の価値や優先度の変化によっても〔影響を及ぼされます〕<sup>2</sup>。それ故に、私たちのテキスト解釈方法を形成してきた諸々の姿勢や期待というもの、新たな社会的あるいは政治的視点が出現する時、急進的に変わるかも知れません。この一例は、フェミニズムと女性たちの諸研究の〔持つ〕あの衝撃が、どのように聖書学者たちを、聖書社会の家父長制的性質に焦点を絞る方向へと〔導き〕、また一聖書物語が今日に至るまで神学的にも学術的にも読まれてきた方法を形成してきたところのー以前は〔客観的と信じられ〕検証されることもなかった〔家父長制的価値観に影響されている〕諸前提に疑問を抱く方向へと導いてきたか〔に確認できます〕。聖書時代の女性たちの人生の隠された歴史が探求され、そして聖書物語に特筆されてきた女性たちに対する〔旧来の〕意識について疑問が提起され続けています。〔本講演で〕私は、女性たちが決定的かつー私は〔敢えてそう〕主張したいのですがー革命的な役割を演じる三つの聖書章句を探求していきますが、さらにそれらを一緒に結び付けることで何らかのより広範なパターンが出現するかどうか確認するつもりです。

---

1 〔訳注〕これは2018年6月14日、西南学院大学大学博物館2階講堂で行われた大学学術研究所主催の公開講演である。原題は、“Three Bible Tales of Revolutionary Women”。

2 訳注：以下、本文中の〔 〕は訳者による補足を表す。

## エヴァと禁断の木の实

最初に取り上げる事例は、おそらく最も有名で、そして歴史的には最も否定的に理解されてきたもの、つまり、いかにしてエヴァはエデンの園にある禁断の木の实を食べるに至ったか、またそれからアダムにそれを渡したのか〔についての物語〕です。その後で神がアダムにその問題について質した際、彼〔アダム〕が咄嗟に思いついたことは、このハブニングについてエヴァを咎めることであり、また攻撃は最大の防御なので、神をも同様に責任あるものとして告発することでした。「**あなたが**わたしと共にいるようにしてください。さったあの女、**彼女こそが**木から取ってわたしに与えた張本人であり、なのでわたしは食べました！」(創世記3:12)<sup>3</sup>アダムがそれとなく言っているのは、エヴァが彼に与えたのでその実を食べたに過ぎない、そしておそらく彼女は神からの何らかの指図に従って行動していたに違いない、なぜならそもそもアダムに彼女を与えたのは神なのだから！ということのようです。この自己正当化がいかにして生じたのかを理解するために、私たちはアダムとエヴァの間の関係性のより初期の段階へ戻る必要があります。

アダムが一人であるのはよくないことだと神は認識したので、彼にふさわしい仲間を見つけることの探求の過程で、あらゆる種類の動物や鳥を形づくりします。この役割のために用いられるヘブライ語の術語は“エーゼル ケ・ネグド”です<sup>4</sup>。これは翻訳するのに困難な句です。それは文字通りには「一人の助手－彼の反対側に」を意味します。どちらの術語も若干の説明を要します。ヘブライ語聖書において単語エーゼルは試練の時の支えの源泉としての神について最も頻繁に用いられます。英語の単語「助手」は従属的な役割を演じる者を示唆します。しかしながらヘブライ語の術語はどうみても特定の状況下で他者に欠けている力を提供し得る－従属的ではなく、少なくとも同等な－誰かとして理解するのが最適です。第二の術語は「正面に」「直面して」を意味する前置詞“ネグド”が元になっています。それは敵対を示唆しつ

3 訳注：講演者によるヘブライ語本文からの私訳と強調。なお以下章句の引用については特に断りがない限り『聖書 新共同訳』からのものである。

4 訳注：イタリックによるヘブライ語の指示は講演者による。

つ、「～に逆らって」と否定的な含みがあることも、また「一致する」「ぴったり合った」のような肯定的な意味を持つこともあります。異なる状況において、どちらの意味も作用し始めることがあるでしょう。というのもエヴァはアダムに対して、神が彼らの間に存在するべきと意図している相互支援関係の一部として、理想的補完を提供することになっているからです。

アダムは彼の人生に何かあるいは誰かを欠いているということに気づいていなかったようで、何か欠けていると認識しているのは実際に神だけです。そこで神はあらゆる形の動物を創造し、かれらをアダムのところへ連れてきます。彼〔アダム〕は自らの能力に気づき、それら各々に名を与え、そしておそらくそれらを区別し分類し始めます。しかしそれらの誰も神が意図した役割を果たさそうになかったため、神はアダムを深い眠りに陥らせ、アダム自身の体から女を造り上げ、それによって彼らの究極的な肉体的一体性の意味を補強します。アダムは彼女を見るや、明らかに歓喜します。「ついに、これこそ／わたしの骨の骨／わたしの肉の肉。これをこそ、女（イッシャー）と呼ぼう／まさに、男（イーシュ）から取られたものだから。」しかしアダムの言葉は、彼の反応は、神が期した関係性における〔対等な〕相互関係を完全には表していない可能性を示唆します。代わりに、アダムは自分と女との関係性をどのように評価していたのかについての二つのヒントが存在しています。第一に、丁度彼が動物を名付けたように、彼は彼女に名を与えます。聖書の世界では、名を与えることは、名付けられたものに対するある種の潜在的な所有権と権限を持っていることを含意し得ます。第二に、彼は彼女の物理的性質を元来彼自身から派生したもの「わたしの骨の骨／わたしの肉の肉」として定義し、それによって所有権のもう一つの側面を表しています。

決して明白に〔本文中に〕述べられていない何らかの理由から、神が創造した動物の中で最も賢いものと描写されているあの蛇が、エヴァに対してその手腕を発揮しようと決心します<sup>5</sup>。蛇の利口さは早くも、一見無邪気さと好奇心を装い、「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたの

---

5 ラビたちによる様々な説明の中には、蛇はアダムがその相手として自分ではなくエヴァを選んだことを嫉妬したので、二人の間に揉め事を引き起こそうとしたとする解釈もある。

か。」(創世記3:1)と尋ねることによって投げかけられた質問の本質の中に確認できます。エヴァの当然の返答はこの明白な誤りを修正し、特定の一本の木から食べるならば死をもたらすであろうという神の説明を正当化することです。しかし神の教示を弁明するまさにその過程こそが、何故神はこの特別な木を区別しているのか、また何故それは禁じられるべきなのかについての様々な疑問を切り開くのです。これはエヴァにとって、まだ蛇が神の動機についての批判をほのめかす前であるにしても、人生が変わる瞬間でした。なぜなら、為されたと申し立てられている何かのために誰かに代わって弁明することは、与えられたその批判をある程度内在化させることだからです。初めてエヴァは、自分が園の中の自らの生活について知っていること全てに対する単純な服従と受容の外側へと踏み出します。その上さらに、神を弁護する際に、彼女はうっかり、神は自分たちにその木の実を食べてもいけない、触れてもいけないとおっしゃったのだと口を滑らせます(創世記3:3)。しかし木に触れないことについてのこの後半の情報は、神のアダムへの元来の警告(創世記2:17)にはなかった部分です。そうすると、その木に触れることも等しく禁じられているというその忠告はどこから来たのでしょうか。おそらくそれはアダムに由来するもので、エヴァの創造後に彼が園についての情報を彼女に知らせた時に〔付加されたのでしょう〕。

かの木に触れることに対するこの禁令を－おそらくは神の名において－付加した彼の動機は何だったのでしょうか。彼の意図はこの命令を付加する事によってその木自体を保護することだった可能性があります。ラビたちには、神からの啓示である「トーラーの周囲に垣根を巡らす」べきとの格言があります(*Pirque Avot* 1:1)。彼らが意図しているのは、民が特定の神の法を破ることを防ぐために、多様な他の保護的な法が「垣根」－その中心法的には触れることすらないことを確実にする一助－として創出され得るということです。しかし彼らはまたこのアダムの付加的な法の事例を、その「垣根」はトーラーそれ自体よりも高くすべきではない！ということを主張するために用いました。なぜならこの事例におけるように、その「垣根」を破っても、すなわちその木に触れても、いかなる明白な結果も伴わないのであれば、か

の〔中心にある〕法それ自体の真実性にも疑いが向けられるでしょうから。もし垣根が倒れてしまったなら、その木の実の方についても試してみない理由はあります。アダムが神の命令に付け加えた事の背後にある第二の可能性は、エヴァ自身に対する彼の信頼の欠如、〔つまり〕彼女はその実の魅力に抗し得る能力がないだろうという彼の疑念だったかも知れません。つまり彼は、彼女がそうした誘惑に近づくことさえないことを確実にすべく、この障壁を創出したのです。彼の良き意図にもかかわらず、彼女に対する所有意識も加わって、彼は保護的でまた恩着せがましくもある役割を買って出ており、それが彼女自身のためになると考えています。しかしそうすることで彼は、自らの行動に対して権威と責任を有するという彼女の主体的人格を効果的に過小評価し、潜在的に土台から崩れています。神が意図した彼らの間に存在すべき平等性はそれ以上に破られています。

しかし意図的であろうとなかろうと、全ての木は許可しながら、一本だけ例外とすることによって、神の動機を巡るこの潜在的問いが生じ得るような状況を創造してしまったのは、他ならぬ神なのです。所与の人間の本質からも、その不可避的な帰結は、この例外の理由に頭をひねり、疑問を持ち、ついには異議申し立てをする—それは蛇によって女に投げられたあの問いの中に既に含まれていたものですが—ことです。こうして、以下に続くその問題についての彼女の熟考において、エヴァは神の世界の営み方に疑問を持ち始めています。彼女を一個の平等なるものとして語りかける親愛なる蛇と出会ってしまったので、おそらく彼女もまた、木に触れることで晒される危険についての誤情報によって、アダムが彼女に対して前提している権限に気づきやすくなっています。今や確かに彼女は、自分自身のための新たなスキルを次々に発見しながら、その全てを駆使し始めます。経験的観察と彼女自身の知的かつ分析的特質をもって始まり、恐らくはそれらを行使し、そしてその後初めてそれらを意識的に言語化していきます。これら〔全スキルの中〕には彼女の実践的な感覚—その実は「食べるによい」、つまり栄養源となり得る—も、彼女の美的そして芸術的感覚—その実は「目を喜ばせる」—も、そして最後に蛇が提起した神的知識の約束についての彼女の好奇心を喚起させ

る感覚—その実は「理解のために望まし」かった、つまり周囲の世界の神秘を解き明かす—も含まれています。推測するに、彼女はその木に触れ、脅かされていたように死ぬことはなかった。そこで彼女はその実を摘み、それを食べ、そしてそれをアダムに与えました。〔ここにおいて彼女は〕効果的に—逆説的であるかも知れないにせよ—、そのために彼女が創造されたところのあの支持的役割〔“エーゼル ケ・ネグダー”〕を成就しているのです。

少し話を戻して、人間社会の進歩においてここで起こった一連の驚くべき段階について認識しましょう。一つの精神が開拓され、人間の知識を獲得する努力の開始が明らかになりました。アダムは、動物を同定し、名付けることによって、この方向への自らの一歩を踏み出していました。しかしエヴァは感覚の世界の探求を開始し、そして知性認識に対する欲求と、自主的な判断のための権利を追求します。もし私たちが彼女をだまされやすい、罪を犯した、あるいは罪深い個人へと引き下げ、彼女を依存的な主婦の役割へと運命づけたりするなら、それは私たちがエヴァを想起する仕方として、なんと甚だしく非道な仕打ちでしょう！ 創世記3章6節の本文は、彼女がその木を的確に検証する各段階を注意深く描写することによって、彼女が自らの判断、つまりその実を食べるというリスクを犯す決定に至るに際して示した思索と推論の優良性の故に、彼女に対して少なからぬ敬意を払っているときえ主張され得るのです。その上さらに、独立心が育まれていくしるしとして、彼女はそのような決断をする自らの権威を定義づけるのに役立つこれらの特質に信頼を置き続けています。彼女は、この特別な木への接近を拒むことの中にある、神によって設定された興味をかきたてる難問に挑戦し続け、そして丁度同じくらい重要なこととして、アダムによって彼女に対して示された恩人ぶった態度にも対峙し続けていたのです。〔物語はこの後〕彼女の独立が問題にされないままであることは許されない〔展開になる〕ことは、おそらく、この物語を生み出した家父長制社会の文化の〔当然の〕帰結です。これらの出来事の顛末の一つは、男が女を「支配する」だろう（創世記3：16）〔であり〕、こうして彼らの間に存在すべきと〔神に2章で〕意図されたあの理想的な平等性を土台から崩しつつ、アダムの権威が再保証されるのです。

聖書の観点において、このこと〔3:16の男性優位〕は園の外側の世界では、究極的にそのままの状態では演じられるべきなのかどうかという疑問が残ります。あるいはその代わりに、その物語は、〔存在していることを〕認められねばならない〔社会的現実についての〕、しかし神の本来の意図を再建するために、絶え間なく異議申し立てされねばならない社会的現実についての一つの認識でしょうか。少なくとも、一つのより後代の聖書の伝承は、この損なわれた関係性を矯正するよう求めるでしょう。雅歌全体にわたって、女性こそが、彼女の家族の男たちやその町の夜警たちによって課せられた制約にもかかわらず、彼女自身の自立した道を追求する能動的な人物なのです。創世記において神は、エヴァに彼女の罰の一部として“ヴェ・エルーイーシェーフ テシューカーテーフ ヴェ・フー イムヨルバーフ”「お前は男を求め／彼はお前を支配する。」(創世記3:16)と言います。しかし雅歌7章11節において、「求める」にそれと同じヘブライ語の動詞を用いつつ、もう一つの選択可能性が表明されます。“アニー レ・ドーディー ヴェ・アーライ テシューカーター”「わたしは恋しい人のもの／あの人〔男性〕はわたし〔女性〕を求めている。」

しかしエヴァによって創世記において演じられた、知識を探求する独立した思索家として役割の観点においてより一層目を引くのは、エデンの園のこのエピソード全体に対する一つの注解として読まれ得る、箴言に見出されるべき章句のいくつかです。例えば、箴言は「命の木」について4回言及します(箴言3:18; 11:30; 13:12; 15:40)。アダムとエヴァは、彼らが「命の木」から取って食べ、永遠に生きることのないようにと、園から追放されました(創世記3:22)。しかし箴言においてその「命の木」は今や人生の優良性と充実を意味するものとして理解され、もし神に対する畏れを通して人々へと提供されている知恵に従っていくならば、全ての人々に利用可能となっています。しかしまた箴言においては知恵を表すものとしての食物の隠喩がいかに傑出しているかも留意すべきです。〔その知恵は〕「知恵という女(dame wisdom)」によっても「愚かさという女(dame folly)」によっても、知識を求める民衆の飢えに対して供されるべきものになっています(箴言9章)。もし最初の女性としてのエヴァには、女性たち一般の本質を代表するこ

とまで意図されていたなら、その時、彼女たちの諸特質に対する最終的な判断は、箴言31章10-31節における「有能な妻」への称讃の詩の中に見出されます。意義深いことに、これは箴言に見出され得る知恵の主題に関する最後の言葉です。もしエヴァの知識と理解の探求についての擁護が、今までに聖書中に存在したとすれば、それはここに、賢い女性たちについてのこの祝福の中に、見出されるべきでしょう。「彼女の口は知恵のうちに開かれ、そして彼女の舌の上には慈しみの教えがある」(箴言31:26)<sup>6</sup>

### 助産師たち対エジプト王

革命的な女性たちの第二の事例として、私はもう一つの聖書的書物の冒頭に移りたいと思います。今度は出エジプト記です。ここではその革命は、政治学の世界における市民的不服従の形態において、つまり権限を持つ者による権力の濫用に対する抵抗として起こっています。その冒頭の章でヨセフのことを「知」らない「新しい」ファラオが出てエジプトを支配したという状況が説明されます(出エジプト記1:8)。出エジプト記の序盤の数章において、その単語「知る」は時々「承認する」を意味します。〔すると〕ファラオはヨセフによってエジプト社会に為された貢献を認めていない、またモーセによって挑戦された時、彼はイスラエルの神の権威を「認め」ない(出エジプト記5:2)〔と読めます〕。以下に続く出来事を読む一つの方法は、この「新しい」ファラオを王位篡奪者として、あるいは、少なくとも見積もっても、暫定的な権力しか握っていないので、己が権威を必死で打ち立てようとしている者として認めることです。そのような状況下における古典的な手口は、その社会内部のあらゆる現実あるいは想像上の諸問題を彼らのせいに来るように、一つの敵を国内にでっち上げることであり、その後でこの脅威となる集団を悪魔化し、中傷することによって、リーダーの下に人々を統合しようとするのです。ファラオが踏んだその手順は出エジプト記に背筋が震える〔生々しさで〕記述されています。彼はヤコブの子孫たちを彼のスケープ

---

6 訳注：講演者によるヘブライ語本文からの私訳。なお新共同訳では「口を開いて知恵の言葉を語り／慈しみの教えをその舌にのせる。」となっている。



ゴートになるように選びます。次に彼のプロバガンダが、彼らの数が増えたことを理由に、国家に対する脅威としてのレッテルを彼らに貼ります。彼は彼らから独立を奪い、奴隷へと降格させ、そして更に彼らに最も劣悪な肉体労働を強制し、こうして彼らを大衆の目に非人間化させるという一連の行動を主導します。彼らの人間性の否定から彼らの生きる権利を完全に否定することまではほんの一步です。密かに彼は大虐殺行為を立案します。彼の選ぶ殺人者には、子どもを生かして世へと迎え入れることに自らの生涯をささげているまさにその女性たちがなる筈でした。〔つまり〕ヘブライ人の助産師たち〔です〕。

正確に誰がこの記述によって意味されているのかは明白ではありません。文法的に、マソラの伝承に従えば、それは彼女たち自身ヘブライ人であるところの助産師たちを暗示しています。しかしその時、明白な疑問が持ち上がります。なぜファラオはそのような殺人の仕事を、自らの属している民に対してそれを実行するなど到底あてにできないようなヘブライ人の女性たちに託したのでしょうか。ところが七十人訳聖書は彼女たちを「ヘブライ人に対する助産師たち」と訳しており、これは彼女たちをエジプト人とみなすことになるので、ファラオに従うことはよりありそうなことです。ユダヤ教的伝統の主流は、彼女らがヘブライ人であることを前提にして、彼女たちのうちの一人をモーセの母ヨケベドに、他の一人をモーセの姉ミリアムかヨケベドの義母エリシェヴァと同定します<sup>7</sup>。それにもかかわらず、それ程目立たないもう一つの古代のラビ的伝承は、テキストの平易な意味を理解する事に関心を持っていた何人かの中世のユダヤ教の注解者たちがしたように、敢えて彼女たちはおそらくエジプト人であったということを受け容れています<sup>8</sup>。

---

7 彼女たちの実際の名は預けられている赤児を扱う方法からきた術語として扱われる。すなわち、シフラという名である理由は、彼女は赤児の「世話をした」「メシャフェレト」からである。一方プアの名は、彼女が赤児をあやすためのポッポ音“プア”を出したことに由来するとされる。

8 カイロ・ゲニザで発見された中世のテキストの分析を含むこの議論についての優れた批評については、以下を参照せよ。‘The ‘Egyptian’ Midwives’ by Moshe Lavee and Shana Strauch-Schick (TheTorah.com) (<https://thetorah.com/the-egyptian-midwives/>)

エヴァの事例と同様、展開しつつあるその物語の主要要素は会話を通じて表現されています。ファラオは、ここでエジプト王として十分な権威を以て描写されつつ、そのヘブライ人の助産師たち、シフラとプアに話しかけます。彼は言いました。「お前たちがヘブライ人の女の出産を助けるときには、その複数の石を見、男の子ならば殺し、女の子ならば生かしておけ。」(出エジプト記1:15-16)<sup>9</sup>。伝統的訳はその複数の石をある種の「出産用の椅子」と理解します。これは単語“エヴェン”「石」の「双数」形のもう一つの用例であるエレミヤ書18章3節におけるろくろについての言及に基づくものです。しかし助産師たちに割り当てられた特殊な仕事なので、一対の石のより明白な意味は男性の精巣を表す婉曲的術語〔と解すべき〕です。テキストは、「助産婦はいずれも“神を畏れていた”ので、エジプト王が命じたとおりにはずせず、男の子も生かしておいた。」(出エジプト記1:17)と続きます。その術語「神を畏れる」は若干の明確化を要します。単語“エローヒーム”「神」は聖書本文においていろいろな目的で使われます。文法的にそれは複数の語末形をしており、複数形の動詞によって伴われる時は、裁判官たち<sup>10</sup>あるいは諸国民の神々を意味し得ます。付随する動詞が単数形である時は、それはいかなる人々によってもそのように認識され得る世界の唯一の神の一般名辞として機能します。しかしそれは、エジプトの魔術師たちがモーセの第三の災い、ぶよを彼らの魔術によって除去できなかった時、彼らがこの現象を“エツバアエローヒーム”-文字通りには「神の指」-と言及した(出エジプト記8:15)ように、より広い意味も持ち得ます。これは、彼らがそれに対して何らのコントロールもできないある種の例外的な自然現象-英国の保険契約の用語で「不可抗力(an act of god)」と呼ばれているもの-を示唆しています。このより広い意味は、おそらくアブラハムがアビメレク王になぜ妻サラを実際に妹だと言ったのかを説明しようとする場面にも存在しています。彼はこう返答しています。「この土地には、“神を畏れる”ことが全くないので、わたしは妻のゆえに殺されると思ったのです。」(創世記20:11)この術語によって、彼

9 訳注:「複数の石を見て」は講演者による。新共同訳では「子供の性別を確かめ」。

10 例えば詩編82編2-3,6節。

は倫理的または道徳的な振る舞いの欠如を意味しています。同様に、アマレク人が荒野を旅する際にイスラエル人の隊列のしんがりには最も弱い人々を攻撃した時、「彼らは神を畏れることがなかった」〔とあります〕(申命記 25:18)。ここでも再び、その句は、何らかの宗教的基盤を伴っているかはどうか、道徳的価値観と振る舞いの有無に関わる意味を持っています。つまり、かの助産師たちは、彼女らがするように求められたその行為の不道徳性を認識し、個人的あるいは宗教的な確信のいずれに起因するにせよ、それを行うことを拒否したのです。

その助産師たちが実際にエジプト人である可能性は、彼女らがファラオと交わした後続の議論においても裏付けられるかもしれません。再び「エジプト王」としての称号によって、彼は助産師を呼びつけ、問い質します。「どうしてこのようなことをしたのだ。お前たちは男の子を生かしているのではないか。」(出エジプト記 1:18)〔今度は〕ファラオとしての彼に対してなされた<sup>11</sup>、彼女たちの返答は、彼が悪用してきたヘブライ人への偏見に付け込むことです。「ヘブライ人の女というものは〔私たち洗練された?〕エジプト人の女性とは違います。というのも彼女たちは頑健だからです!助産婦が到着する前に、彼女たちは産んでしまうのです!」<sup>12</sup>この返答は、彼女たちをお咎めなしのままとするのに十分な効果があったようです。ファラオは今や、秘密の企みから、生まれた男の子は一人残らず殺せという公然の命令へと転じます。実際の言葉遣いから、この命令に関する限り、エジプト人とヘブライ人の子どもの間には全く何の区別もなされていないように思われます。またしても、それはありそうもない政策のように思えます。〔仮に〕その社会が、彼のプロパガンダと振る舞いによって余りにもダメージを負わされていたの

---

11 称号が「エジプト王」から「ファラオ」へここで転換していることは、彼女たちの彼との関係について、もしくはおそらく彼女たちが彼に与える信望についての質的变化を暗示する。もし彼女たちが効果的に彼の偏見につけ込んでひと芝居打っているなら、それ〔尊称の交代現象〕は、これら動物然としたヘブライ人の女どもに対処しなければならぬ憤慨した共謀者として、ファラオとの間に新たに共有された親密さをそれとなく匂わす〔風を装っている彼女たちの戦略の〕可能性がある。

12 訳注：助産師たちの台詞は〔 ? 〕も含め講演者による。

で、このような狂気〔の政策〕でさえも受け入れられかねないというのでない限り。物語は、助産師たちの行動のおかげで、イスラエル人は数を増し、甚だ強くなったと結ばれます。彼女たちの行動の報酬として、テキストは「助産師たちは神を畏れていたので、彼〔神〕は彼らのために家〔複数形〕を作った」(出エジプト記1:21)<sup>13</sup>と付け加えます。通常の説明は、彼女たちが相当の所帯をなすことができたという意味にとるものです。彼女たちをヨケベドとミリアムと想定するラビ的伝統は、これらを部族の発展として理解しています。奇妙なことに、その文中の「彼らのために」という言葉は実際には男性形が用いられており、もしそれが助産師たちへの言及であるなら当然そうなるべき女性形〔彼女たちのために〕ではありません。それ故、それ〔男性形の使用〕は、単にその章〔出エジプト記1章〕のより広い主題の継続である可能性があります。すなわち、助産師たちが為したことの故に、イスラエル人は生き延び、繁栄し、さらに大きな「所帯」を確立することができたと。この解釈なら、始まりに使われたのと同じ単語〔「彼の家(単数)」(1:1)と「彼らのための家(複数)」(1:21)]を反響させることによってその章を閉じていることとなります。「ヤコブと共に一家を挙げてエジプトへ下ったイスラエルの子らの名前は次のとおりである。」(出エジプト記1:1)。

聖書テキストにその名を言及される名誉を分かち合った二人の助産師は、赤児を隠したモーセの母、幼いモーセを見守ったミリアム、そして彼を養子としたファラオの娘によって連結されています。これら全ての女性は、単独で、また一緒になって、ファラオの計画に抵抗しました。そのことが最終的には、あの出エジプトと民族としてのイスラエル誕生に至る道を切り開いたのです。彼女たちは静かなる革命家であり、自らを大きな危険にさらしてでも、国家の権力や権威よりも個々人の命の価値を優先させたのです。

---

13 訳注：講演者による。新共同訳「助産婦たちは神を畏れていたので、神は彼女たちにも子室を恵まれた。」

## ハンナ対祭司エリ

サムエル記は、異なる部族から単一の統一王国へのイスラエルの変容を巡る劇的な記録を提供しています。強力な政治的諸力とその書全体に亘って働いており、そこには最初の王としてのサウルの興隆と悲劇的な衰亡もあり、ようやくダビデというカリスマ的天分に恵まれた、しかし欠陥もある人物によって後継されるに至ります。しかし、政治的な軋轢と競争、野心と悲劇の壮大な物語〔サムエル記〕は、単純で静かなホームドラマ、心底から子を産みたいと切望するハンナという名の一女性の物語で始まります。彼女が産む子どもは、後に続く出来事においてキングメーカーとして決定的な、しかし極めて両義的な役割を演じるサムエルであることは、彼女に宗教史上の重要な地位を保証しています。その上さらに、2章で彼女に帰されたかの詩的な祈りは、神によって油注がれた王“マーシーアハ”「メシア」の到来を予見しているので、後代のユダヤ教の伝統 (Megillah 14b) において彼女を女預言者と〔位置づけ〕させています。しかしサムエル記の著者は、これらすべての極めて重要な出来事に直ちに突入するよりもむしろ、出だしの章二つ分をハンナの非常に個人的な物語に捧げることを選びました。それはなぜでしょうか。

エルカナと呼ばれる人はおそらく最初の妻ハンナが不妊であったためでしょうが、二人の妻を持つことが出来る程に裕福でした。彼のもう一人の妻、ペニナは子沢山だったので、ことある毎にハンナをその不妊を理由に嘲り続けてきたように思われます。これは特に、エルカナが毎年、祭司エリの仕えるシロの神殿への巡礼に家族を連れて行く時に起こりました。ある年、自らの運命の辛苦に打ちひしがれたハンナは、神に祈るために神殿の入口に行きました。以下において、私はラビ的注解によってかなりの影響を受けていますが、それでも聖書本文に与えられている直接情報に特に焦点を絞るよう努めるつもりです。ラビたちはハンナの言葉を、聖書に記録された広範な個人の祈りについての最初の例として理解したので、それを礼拝祈祷についてのいくつかの原則を導き出すために用いました。しかし、彼らは用語のわずか

な変化にも敏感でした。例えば、10節において、「ハンナは悩み嘆いて主“に”祈り、激しく泣いた。」とあります。ここで「[主]に」と訳されている前置詞は“アル”で、より一般的には、「～の上で」または「～を越えて」を意味します。この章の後続する機会では2回とも（12, 15節）、彼女は「[主]の前に」祈るものとして記述され、そこでは代わりに「～の面前で」を意味する単語“リ・フェネー”が用いられているので、それ〔アルの使用〕は注目に値します。その二つのヘブライ語の前置詞の間の区別は重要です。なぜなら、最初の祈りと嘆きは彼女にとってなくてはならない感情の放出、辛苦と、恐らく自分の運命のために神に向けられた怒りの〔感情の放出〕であったように思えるからです。確かに、ラビたちはそのような細部に彼女の神に対する非難を読み込んでいます。例えば、彼らは、彼女が11節において神を「万軍の主」として呼びかけている点に注意を促し、彼女こそが〔自分の台詞中で〕この称号を用いて神に直接語りかけた最初の人物であると説明しています。そして彼らは、彼女がその称号を非難の形態として、あるいは少なくとも彼女の不平の言い訳として用いたということを示唆しています。〔すなわち〕「あなた〔神〕がご自身の世界に創造したあらゆる万象の中で」と彼女は主張しました。「そんなにもあなたにとって困難ですか、私にほんの一人の息子を与えることが!?」〔という具合に。〕別のバージョンでは彼女は、神が女性のために創造した全器官は、各々の目的をもって各々の場所にある〔筈だ〕と指摘します。「あなたが私の心臓の上に置いたこれらの乳房、それらは乳を与えるためのものではないですか。私にそれらで以て乳を飲ませることのできる一人の息子を与えてください！」（Berachot 31b）ラビたちはハンナを、モーセとエリヤと共に、「神に傍若無人な口をきいた！」にもかかわらずその祈りを受け容れられた者たちのリストに載せています。

もし私たちが聖書本文のみに留まるならば、おそらく彼女の神への祈りが成功した手がかりは、彼女がしたあの誓いの性質に存しています。自らの辛苦と怒りを解放した後、彼女は別のアプローチを試みます。「万軍の主よ、はしための苦しみを御覧ください。はしために御心を留め、忘れることなく、男の子をお授けくださいますなら、その子の一生を主にやささげし、その子

の頭には決してかみそりを当てません。」(サムエル記上1:11)<sup>14</sup>彼女が三度も自らを「はしため」と言っていることは、彼女のアプローチの謙虚さを示唆しています。おそらくより重要なのは、彼女が行ったその誓いの性質です。なぜなら、自らの子どもを持つという切望を満たすために、彼女はその子を神に献身させるという犠牲をすすんでしているからです。それは、その後続く物語が明らかにするように、離乳した時には彼を神殿へ連れて行くこと、そこ〔神殿〕で彼は祭司らに奉公しながら成長していくだろうということを意味します。彼女が子ども時代の彼を愛でる機会は、家族がシロに上って来る、まさに同じあの年ごとの訪問〔の時だけ〕に制限されるでしょう。そして彼女は、成長する子どもに着せるべく、〔毎年〕新しい〔小さな〕上着を持って来ることになるでしょう。

しかしハンナのキャラクターの強さを指示するもう一つの次元が存在します。エリは彼女が祈っているのを観察していました。どういうわけか彼女の唇は動いているのに、声が何も聞こえません。そこで彼は酔っているとの理由で彼女を非難します。なぜそのような予期せぬ告発が〔なされたのでしょうか〕。私たちが次の章を読んでわかるのは、エリの二人の息子が祭司の特権を濫用していたことです。彼らは犠牲のささげものから〔祭司用に〕取り分ける作法を巧妙に操作して、自分たちがより大きな分け前を得ることを保証しようとしたばかりか、彼らのやり方に反対する人々に対して力づくで脅すこともしていました。(サムエル記上2:12-17) その上さらに神殿に奉仕するために来た女性たちと性的関係を持ちました。(サムエル記上2:22) エリは彼らを制御できませんでした。この理由で神は彼の家系の祭司職を終わらせることになるのです。〔そんな祭司〕エリの告発に対して、ハンナは一步も引かず、彼の根拠なき仮定に異議申し立てをします。「はしためを“バトーマーローナーアル”墮落した女だと誤解なさらないでください。」彼女が使ったそ

---

14 「頭には決してかみそりを当てません」は、ナジル人の誓いをほのめかしている。ナジル人は自分自身を一定期間神にささげる者で、その期間中は、他の諸要件と共に、髪を切らない〔誓いを守る〕。それは同様に神に仕えるために生涯をささげたサムソンの〔ことで彼の〕母に〔主の御使いによって〕与えられた命令と反響している。

の術語は、エリの息子たちを弾劾する際に使われた“ベネー ベリーヤール”「ならず者」(サムエル記上2:12)とまさに同じでしたが、そのことは、彼女が彼〔エリ〕の告発〔神殿で酩酊〕のありそうな理由〔息子たちの墮落〕を十分気づいており、シロにおける祭司職権の濫用に対する彼女なりの批判を表していることを示唆しています。彼女の論争力と彼女の疑う余地のない誠実さは、エリをして、神が彼女の請願を聞き届けるよう祈りをささげるに至らせます。

ハンナの物語の何が革命的なのでしょうか。神殿においては、神はどのような仕方であプローチされるべきかを決定するものは犠牲祭儀でした。ハンナはそれとは無関係に独立して行動したように見えます。祭司たるエリは彼女を止めようとしますが－慣習的にそのような請願は祭司を通して神に告げられていた可能性があります－結局彼女の請願を是認しました(サムエル記上1:17)。彼女が通常の祭儀の枠内で行動していたのか、あるいは突出する形で行動していたのかいずれであったにせよ、彼女には神に〔仲介する物や者なしに〕直接にアプローチする機会を求めて、神殿の権威を代表する祭司と論じ合う気構えがありました。こうして彼女の祈りは聞かれたのです。

### 女性たちによって導かれ、あるいは触発された三つの革命

私は冒頭で、これら三つの物語はある共通点を持っていることを示唆しました。まず明らかに、全て女性を不可欠なものとして含んでいます。驚くべきことではありませんが、それらのうち二つは出産についての諸問題－殺人政権から新生児を保護すること、神に仕えるべく定められた子どもを求めて祈ること－を直接に扱っています。創世記の物語でさえ、アダムとエヴァが園を去った後の最初の出来事は、アダムがエヴァを知り、彼女が身ごもり、出産したということですから、関連したものと言えるかも知れません。

しかし、それらが特別な注目を獲得している〔何よりの〕理由は、ヘブライ語聖書の中のこれら三つの書〔創世記、出エジプト記、サムエル記〕の冒頭に位置しており、〔さらに〕各書にあって三つの物語全てが、人類とイスラ



エルの歴史における根本的変革のいずれも先駆けとなっているからです。創世記の冒頭にエヴァの行動がなかったならば、人類史というものには存在しなかったことでしょう。その代わりに古代人アダムとエヴァは、命の木の実を定期的に食べながら、一種の永遠に延長された子ども時代の中で、今なおあの美しい園を無邪気に手入れしていたことでしょう。出エジプト記の冒頭にかの助産師たちの行動がーファラオをたばかった他の女性たちと共にーなかったならば、モーセは存在せず、よってイスラエルの子らも、出エジプトも、シナイでの契約も存在せず、ひいては人類を〔神と宗教的伝統が自らの人生に何を期待しているかを理解し、正義の行為を行わせるべく〕インスパイアするヘブライ語聖書というものも存在しなかったことでしょう。〔サムエル記の冒頭に〕ハンナの、子どもを持つという決意と、彼女の、ほかならぬその子を神に献身させようという意志がなかったならば、サムエルは存在せず、サウルやダビデも存在せず、それに続くかの複雑な歴史ー究極的には聖書のイスラエルについてのこれらの物語を世界の舞台上にもたらし〔今日世界の人々が聖書物語から多くを学べるまでに至っ〕た一つの歴史ーの何もかも存在しなかったことでしょう。この最終的な発展は〔サムエル記上〕2章のハンナの祈りにその起源の一部を持っています。それがハンナ自身に由来するものであろうとなかろうと、あるいは後代の編集上の付加であろうと、彼女の祈りは効果的にサムエル記の中で後に続く諸々の出来事のプログラムの序章になっています。しかし、それらをはるかに超えて、それはまた神による歴史の究極的支配を断言し、世界を変革する神に油注がれた王という考えを初めて紹介しています。

聖書の歴史の残りの大部分は、家父長制社会にふさわしく、男性たちの行動によって決定されています。ではいったいなぜヘブライ語聖書は、これら三つの書の冒頭に、それも重要な変革の瞬間に、独立心のある自発的な女性たちを置くことを選んだのでしょうか。その答えの一部はヘブライ語聖書の破壊的な〔支配体制を転覆させる〕性質にあるのかもしれませんが。その性質が、権力を持つ人々〔によって支持されている〕文化的背景についての諸前提ーだからこそあの限定された〔男性に従属する〕役割が女性にあてがわれ

たのですがーにしばしば異議申し立てをするのです。しかし、その大変予期せぬ性質は、読者に、もっと注意深くここで争われている潜在する諸理念、それらの現下の文脈を超える諸原則を見るよう強いるのです。エヴァの行動は、どんな結果になろうとも人間が知識を探求することを促し、間接的に祝福するものです。出エジプト記の助産師と他の女性たちは、たとえ大きな個人的リスクがあろうとも正義のために闘おうとする者の模範です。ハンナの物語は、たとえ公的な宗教機関が腐敗している時でさえ、個人としての霊的高潔さを持ち続けるべきことの証言です。これら全ては究極的にはエヴァの遺産の一部です。なぜなら、彼女を通して、私たちは善悪の知識の木の実をすっかり平らげてしまっているのです、その結果を甘受し〔、その重要性と共に生き〕なければならないのです。